

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak LICENSED PRODUCT

3/Color Black

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

A

M

B

19

18

17

16

15

14

13

12

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

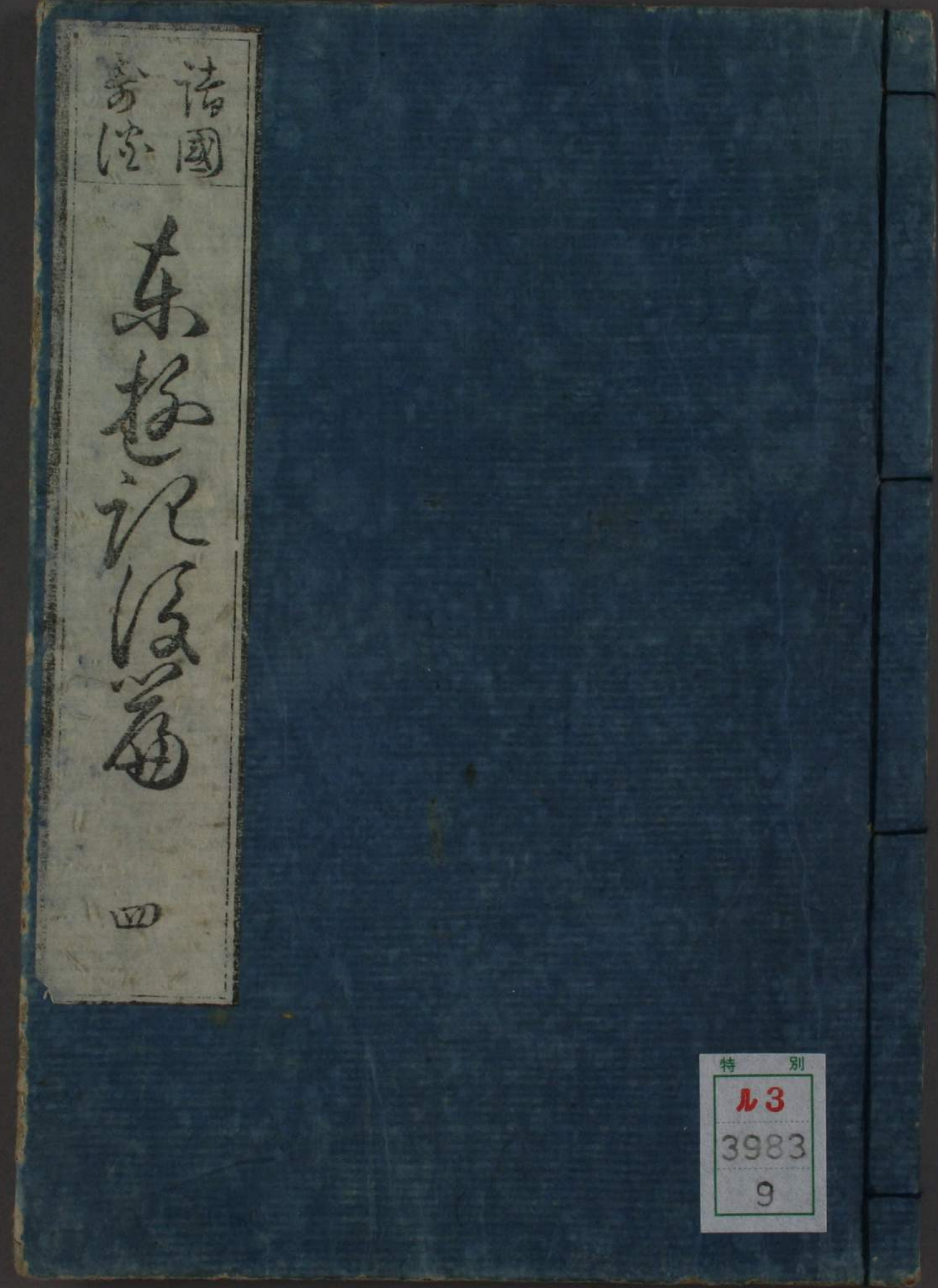
15

16

17

18

19



家 諸
国 語

東 抄 記 後 篇

17

特 別
3983
9



113
3923
9



東遊記後編卷之四

熊野御前

南谿子著

東海乃筋天龍川の東麓小沼田といふ所の此の熊野御前
 の古跡あり傳へ云熊野は沼田の長久保なりといふのひうあまを
 内大臣平家盛下はなす小沼田小沼まら熊野の母痛まると昔こ
 しきむかひのゆとゆく老母の痛とこひたしと頼小形ひり
 宇治の飛愛ゆりしつと許さて彼津曲小形まるとし
 日花乃のほまふ巨員をりしつと熊野の君の痛と花の痛と
 うはるうでかきまんよるういふせむたのまか女はむか
 一糸の花やううんうまをけまてゆくと感ふ痛と花の痛と

東遊記後編卷之四

<99-1009>

いよめたんぐり鯉舟に載るのめ女ありしやせまお祭の名今
おぢすしとくま里おまきいん城して昔城ありしりぐり
りりー平家之誓一の茶花中つたりしより一徳山北曲の里
と天姥川のありの昔の伊中く富基と茶曜づくとつらあら
しむとてあふして名の突いもあなり

那州の鬼

お州の鬼お佐川にいらあまゆらんよすのたは甲の割とほ
んとまんとくこのまんとくくおらまのやうに志先やふ
く日新とまんとくおたれどえの者よては又三里とのまんと
てよ日の目ふらりていんてまてあゆあしにいひのか

おは州の鬼おまのやあんと疑ひくり運房老まお先の者を
ゆくお日新まや向ま着てまの及とて人いそまむり付
えくおんがゆと見えにまの人のまもはまにいひたり
鬼おく人ととり食お神おに夜まけまりしぐをまはる
アとくハ白ま小むとほ乃りよまをいん馬のまのあくら
ごらあや一まこの乃と鬼のおめりおむらふらむま
しハ運房さんくまもより先はけし鬼お一疑まらも命
ののくこまをけしおまのめくお疑まらりきよなるん
ゆんハたしとままおまもまもあふふまこ小まのま
とて人おまらもまもまのまの鬼の人とあひ合お杯

昔は此れも奴抵をたのまきとて二才の鬼と今の世も位で
より半ばかりを鬼い鬼い赤鬼り虎の皮は憤鼻禪古き
や新さや採り討てて替へるは採り討てたのほつみきか
わや一のつゝを今と日もあらふむうの宿まごめゆき
つゝと中と同おはあそとなく終き一休とて旅の人の不故
の事候家あゆみおはせんはごうり鬼あきとていふとて
おはるおらんやこのかたは里のへまらるまらとて隣村の
九島助あきつらりのおおと海一といひて時利のめい
せに同しねと人候をらるまらとていひて又人お
同し又鬼のつゝとわ中くもたたりとれどこらまで

同し結小恐まぬらふらとやう後くやふもあつと昔の
うらる河とあや一様小目足もたけぬとえゆ雨程は海
くもつゝとらんぬとこのかたは里のへまらるまらとて
小きららあぞをむつゝもあまじとれとていひて鬼の
事いり今夜は黒小者らんとていひて昔も同きとて
さしとてあつと入つゝとあ同しとて鬼はつゝとて
掘りして恐るおれとていひてふあつゝと古郷とていひて
小及べいかは奇異の事とも遠事やたつゝと宿り求ん
とあつゝとあつゝと者候といひてやうく六十小餘とて
海と二十にみ計なる男と候りおれ小者らとていひて

さうく園庭裏中よりして本質の飯をそとくも又彼
のゆきまは老婦の世におのこしてら幸ひもさ付合
小い小色土の女と云葉一し月小夜たぐてて何事
いふとも志まげらば鬼ハいさる飛と頼小角と刃と橋
小虎の唇のぬんどせりやせり男がうりてぬりて左
らりのゆらあふどとまねらうハいつらものごとくハ只
犬のどくあしとがーたありと云やとくハ大ありやや
同ハいさごとくと云ねハ狼あつハあつたやといふ小狼とも
いやくゆーと若小養折新と刃合をぬたうとがらぬ
るまふりといふお先程とまの細くハ俄小珠お流し

ら他とておき流しき事いふやうらあハ狼くくりく笑小此小
佐川の人も六七人を喰殺さしきのあまは向おウヤムヤの
者小飛かろも小彼老彦勇の男めくつと総伏し身乃
かとおしとばし小狼と総伏をきり小牙小す鉄もきま
総伏をぬとがらふんとも志ぐてやうく小おつらるる
ひろのへらるんおつて狼の頭成きき碎て殺ぬれど
其牙もおちるも首をて家小ぬりて死せりあど此るの事
忍ろしと派りる集くいあめで是も狼小痛付て白登
數十足出く人を害をばがらん我ハ奮然の為ふい道境
あまうて金と夫ん事いふ計倍しとるあつとあひら

下は三日夜、目もあぐは是れり、器は、
 けりし此里亦住らん、まきもあぐ、盗^{ぬせ}が衣^い被^ひとも與^あ
 小^こ一^{いつ}仇^あり、^ち密^みに施^せさる^る異^いれ^りの戦^{たたか}の器^が
 小勇^{こゆう}を扱^はじ^つと海^{うみ}舟^{ふね}虎^ことよ、^か赤^せす^るお^もの^ひり^と志^{こころ}ある
 者^{もの}のさ^きき^き事^{こと}おあ^らげ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ま^まき^ばあ^らる^中、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ

ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ
 ち^ちあ^らせ^し、^あら^たり^たり^き事^{こと}おせん^こ

小運くして子籠小向への宿付より関つありありと
信のこの小籠くきくきく碎し狼の頭けりる
ハ何方取ましや又へびんぐに
筋二里の種とくもあつるさ
痛くくやうの狼の出金に
商人と組小がを
小六里の種とくもあつるさ
食ふりのさき
玄風から
とがりぬき

松嶋

五月八日奥州松嶋見物のきり小籠寛乃所杉坂と
津國屋和助と
見物
と四五人連ち
取して見物
夜と
振舞
の
目へ

昔は女の心もろくも縁は産ませどふありか調子とい
わゆるりこころむひさしといふもさうし乱俗放逸の事こそ
府殿もあつたおと母慚の法師もやとてをくそ
そ初めのぬふいさ船もくきうんといふ小僧女その
まふ接ふてあつたすく法師を栲ぶるふ志免く踊り
舞う我も舞ふあはれ法師らや同様にあつたね坊の風系
といつてこのおもふふんといふあんなのふ祥の法師やと
へおつたりとて入口はさうもうもあつたね坊のねふとら
ちり只ふ人塩竈の浦よりね坊の種もてお里半乃ふ
信濃終小田原又むと山脈を渡り買切漕出とてまはふのど

やうそ風も大勢ありいふそはにさうといふへと向あつた
小岸より渡ふふ丁のふふりさつあつた舟もといふとら
十八町ありさうのさうとて難い時め右の方ふ東宮様といふ
里の向ふ入川の切戸のを渡り湯もととまたの方渡ると云
ふ漁家あり難い時らたふおと舟り川の方ふ向ふ東
方へ流く連なりとらさつたをく痛むとて病の切戸より東
海へ入りとら人けり流り外もある流く我舟もさう後
くおらうとして南へ流る小こ切戸よりおとくの流くと操り
まのどまかろうとらぬとらとて又芝居杯の川へ下りたど
し其の味もふらりといふとて多くの氣ありあつた話といふ

以て海の名を付地産物為帽子子鳥ホミ紙花とく似たりを

筆捨鳴 沖唐戸嶋 松の鳴 水鳴

支犬鳴 鶺鴒鳴 親和鳴 屋形鳴

二子鳴 鶺鴒鳴 地鳴 鞆鳴

太鼓鳴 青海鳴 汐干鳴 松浦鳴

搭うら鳴 旗うら鳴 内裡鳴 后嶋

都嶋 二王鳴 塩焼嶋 物々鳴

主水鳴 柵鳴 箕輪鳴 鏡嶋

比羅鳴 化粧鳴 鞍懸鳴 あぶら鳴

貝の鳴 伊勢鳴 小町鳴 昆沙門鳴

大黒嶋 夷鳴 ぬく鳴 雄鳴

旭鳴 翁鳴 子黄鳴 徑の鳴

於此亦取此色くの為成さる教へりやまらさる不取はる
く四方の系糸と見渡すとすうに心のゆくゆく十分の一も
さうゆいど八百鳴さうと云海不教百小竹さうと云塩寛の子
賀の浦より松嶋と三里本の乃糸あはれとく海亦いゆる
とある人或ハ七丈計とてとく度ふ明かかくのどく鳴の乃皆
入海がれ風めりともども波立まらうとくいり此鳴くのね皆赤
色うとく枝皆下り垂れもらねのどく故とて糸を艶と名
て極りず相毎以権鳴不付くより方々小粒鳴願と大也け鳴

之見佛禪師の死後の此と堂宇今小連まら湯のありき
るこま文小符ゆる碑あり元僧寧一山兼倉達長寺小住持
と一付見佛禪師の為小書とる碑小して字懸いふとて苔封
して文字カてつたおまきせのくも掃めて移すなり石碑あり
こみ此種の中ら芭蕉の銘をたのめ試みる祇園共流の
分の碑或ハ騷人の法碑おまきし物とぞ此佳景小對とぞ
依る者ぬとも是に初種傳えとつくと大なる後此流り此
の所小おわて又も湯とら掃そ松海小海る今松海と名
付らぬ陸地あり町家形伝並べらまきハ皆括帳あり松海
の所耕他の地がくし農人今もいづ又け此は瑞成寺の下にて

殺も禁制のふがれハ漁獵入者おもわど他の街にあり
りまハ商家もあはれ大なるハ只松海の景色を覽ん
成宿して酒母とする事ハ瑞成寺街のあ北におまき禪宗
あり大地也因山い再ふ名なる又真隣土車四郎入道がとい松
海の町とらハ景色んぞう一景もハ只舟行のちと相見わ
仙臺ろくのつりハ松海おたよんハ必富小登るべ
松海の糸ハ多し余るもとらうとすしふもて又富小おる
東山よありてと道か十丁あり富山と云ハ親音の書場
あり田村將軍乃用いありとてとて十丁げらうとあり
くけとありハ舟一の言とく此山の絶頂のありと富春

山大仰寺といふ寺ありけり寺の書院の庭より東南の方で
 刀さしハ松崎れ金堂一室の中不備大徳あり或は里小舟
 六七里計とてやてく八百八傳建たる風系給ふきふ西湖の
 界小舟似たり遠く眼みえぐせば東洋取うもかく海小
 天下中一の絶景筆紙とてとまき小あづげくおもうて松
 崎の俗系ひらやとわさう小奇巖ありて画園のごとく
 忘小舟形とて一全既小天下とせぐりて名傍の地や
 ざらおもき小舟小松崎の風系也はとまきりの花
 所よりん事ありけり小舟生くもたさるらるすきや
 五里外の嶽の身とてあるき小舟の親しくく小舟

多々飛して書はり又松崎より松崎より陸地とて
 塩竈の杉坂小舟松崎と塩竈との陸地は小舟とて
 名に上流初らひり舟きりん海とてくも有る小舟系
 多とてんま歩を舟とてくも有る小舟とて既小陸地より
 松崎小舟とて小舟のまはり松崎の景いなり小舟
 陸地より一かきとまげく既小舟のまはり小舟舟
 て松崎より海小舟のまはり小舟とて陸地より景地と
 つも見えうけ海とて小舟のまはり小舟とて小舟
 風の舟といふも危き事いふとて松崎小舟とて小舟
 是れとも小舟とて小舟とて又小舟とて小舟とて

東遊記
卷之四
後



東遊記
卷之四



舞樂

我が神國の事ゆきかたふあが世間じぶくの事なるを
 舞もろハ舞ハ舞小尺百舞少多鄙田今ハ物事皆朴ありて其
 氏祚をどの祭禮とのりの最古雅りり事多越後日系魚
 川小竹此を一の宮や移るる事あり宮ハ一の宮とあるは天
 津社とのり毎年三月十日祭りありけ奈小兒の舞といふる
 あり是を尺八も吹笛古樂あり舞の面杯古物多一横笛太鼓
 といへけやと事るる音律小尺拍子計を鄙の舞
 とも和調りり舞ハ舞つるたけ雅樂の舞あり例年十二曲
 代奏とて之を名

振許

小兒四人舞

按摩

小兒面舞

雞冠

小兒四人舞

抜頭

大人七人面舞

破魔弓

小兒四人舞

兒約曾利

小兒二人面舞

能抜頭

大人七人面舞

花菴

小兒四人舞

大納曾利

大人七人舞

太平樂

小兒四人舞

退出 儀王

大人も人舞

小児ハ大抵十ニ白文計の者ト撰ハ集ル大人ハ例年教養ニ入ル
 老若三ツ月トあり天津社の拜殿ニ毎日拍子合せて踊ル
 幸あり舞臺ニ入ル今殆ろの儀ナシト云々
 律儀小舞ハ名もなきものゆゑ小古雅ナリ事ニハ何ものハ
 小舞ハ名もなきものゆゑ小古雅ナリ事ニハ何ものハ
 三四百年前暫ク影無キ小舞ありとの老婦云々
 手紙云々居々中興ナリヤハ三都の代藝卒の亦も
 時ハ盛衰ナリヤハ花街柳巷の事ハ小舞ナリヤ
 奇の事小舞ナリヤハ大内のおもは古雅なる事ハ

祭礼と好古の素足をも好くきく

漢文帝

奥州二本松より白川へ本をめぐり驛々民家の戸口漢
 孝文皇帝守護瀆と板めぐり城の礼法はさう切も
 うる心からをせしめあつたの家として見る事
 ありあつたものと十軒月サ彩目程はまき此れは
 之宗トハこれハ何方の社ナリ出る事ハ
 日光山より例年神主より奉りし何といふ社
 やとありふり百姓の老婦もさういふ事ハ
 ゆゑめて文書ハ祀とる也社ハ何と名付け何村の氏社ナリ

やうにわくくえてし一歩もあきらむかかひほこせぬとみる
もしや何事とぞと此文帝ハ唐王とて七世の天子の中かこ
王以後は天子とも呼まのれに意深き君ならはばはは
一歩もたわとい祀るべし我日本あまの勸請して民家の戸
戸小守られぬほむ事仁徳の有徳さるゆゑに又越前
後深き所の何色の氏もくも民家の戸もくも細川越中守や
おきれぬまき身れともはまらぬとて又細川侯ハ畠村の
大名よきとをまにまは政の務もくもまた既日本中おま
えとくも名は書く身れとて

戸隠山

戸隠山一山に伝説云のふの方ふをりて祇ほくある方ふあり
伝説ハ懸崖のまき連山は傳のぞくはるふけ戸隠山の基
石ありてそのまをまいていづまはまらんとせむいざとくある
心ならずも力難命とせむとらとて天照太神天の心とふ
らりせむひらけ神ありて神樂は奏し一もの
とわはち神と名とてか一内とら用とありて一のものを
のりてよ力難命とせむの戸隠に放ち抱擁多し一けは伝
ふはまらぬとせむとらとて戸隠山なる山とありてよまらぬ
付とらとせむ世俗のつひはありぬけ山小たけら洞窟あり
ま穴の中由大境あり九頭龍控境と名付てけらの精身の

社ありとも頭九つあり終る神農・虫後の靈神あり
 社人毎日定の中ふ神供成備へく生中うへ海て入り
 見ど退る海のくお目い神供の物つとゆはにきり
 かしよても火のきんしる食いし中お食いぬりよ
 又ふ相お好いぬ誰とも終らぬ人相を定のは入を
 く祈念しるふあさる定の中ふく相を定へ食い音中
 以人皆ふまき眼をささげはひふま終て見てるあ
 以法の終中けつとつとつとつと上方中を相とさちて虫
 喰画の痛ぬ治さんと立終する人あつを方あつ奇効
 ありとも云君海まふ孔雀橋文集の中ふも世のとのせくに

おやとらるるの候えり余を佐州おぢひらやてはつと
 身成探り且又控現小相を執りたるひしとや附さる
 のたそは登心とびやぬ帯ら法を人身に供びくしつるも
 あつ又ふお中とく民の食も食物或は肉けりてあつ食
 たり邦社ありしゆふりつはゆあふあつは武州海軍神
 の由来のくさ事と毒地悪對神明の宮殿あり居て
 食て食するなりとと人智印も又華盛もあつて後ハ
 毒地悪對の象中かき今も人食成あ合ふ神社
 狐とあさる社のかふくもえとくもあつるふ九頭龍持
 祝のくもい身の奇なりああり

大魚

北極の地夜中のたきクルウシラドにといふ所の海は録
鴨の海中の六がく魚のたきあつて雷人の説とす
はくろあてまらうわらる物ありといふ海金とすのあり
里親しく東海の人あましくふ東海夷の海はたまとい
ふ魚のつしまら二里二里よりなるるはひふ魚の全
身はたつらん人よりまはは魚由ふきく林よりハ少ぬる
夷の捕船は毎夜出遊まらうとて二魚にころる時ハ海に雷
のどくはまて風をいふ波浪なり鯨東あふ遊走るか
くのゆくちの時をすはたさあまうらうとて備船を

あく小遊ゆるうへ極ふ海は海に浮るとるふたを海に
つと出まるとくく見たまの脊中尾鱗がりのわら
みゆりげうとて二十匹二十匹の鯨を呑み鯨の網を吞み
くくがらゆきは魚気色ハ鯨もあふ遊走らうら極ふ東海夷
の海ハ即日本奥州の東海すて東の方ハ數百里のちふ極
ちく世界第一の大魚をさしかくのどく大魚をまらある
べし二里二里よりなるる大魚ありといふ伝はつては中がし
ども又あるはむらうらうらうらうらうらうらうらうら
昔の又人言ふはむらう二十尋二十尋の鯨も海あある事
ゆき怪しく石は磯もあひいなるやうなり海をくはらむ

海に雷の

日中すくハ言中海をこしやるる由も小見しり今も縁あ
るものと怪しむるなりしをバ数百里を開きたり大海の
わく海らの大魚あらしを怪しむるに庄子の鯨鵬を
寓言とて莊子と實ありといふはれど都行り赤縣神州の
ゆきこのもの九つ有りといひも虚妄の空説く多しむや
今番の宗と見ればたゞ今までのまじき必十と二十とわけて
たぢにぞいぬあしげはたさきより附入鯨をたさうとすふは
ら次まふ文お開らせし神代おまもと建つらぬあまのつた
かり

塔影

塔影

信州諏訪の神小と世倍小七石と伝ありといふまじき
の小上諏訪の塔の教下諏訪の神の拜敷おうけりいふ余も
信地まをきく見たりしやゆか付てて海をう虚説くとも
い居らまは天の五年乙巳秋京都東寺の塔の教大文の
民家よりけりや沙汰しりか朋友四めんがていひくはく
みし丹羽又左衛門といふ百姓の家よりわくともいふ
る海を驚嘆しけりも多きなるびくく新にうら海
こつとこひあぐりこもあふ入まきく新にまよふとれしけ
く大勢見おふまうけひていへ迷惑がれしと余もあま
れりいんをまべつといひて入口の戸と開ちるか海内のも

下内と暗くして小口の戸は落の穴も七八分計あり
 塔の影入る倒小土房小うけりて影は極はみん汁
 ありて九輪寶譯もまじり影くくしてまぬ白く又かの戸
 板は持てて穴小急小まきハ塔影短く小うてぬ白く斜
 小向小色ハ塔の影大すも影びり小うてハ或ハ汁小うま
 こと奇なる事目と影さう暗くや好くしつめてさうこのく
 うけまうといふ但暗天の目於日塔影照く明らなる時
 此影小うけり影と亦ふ影の足と我ハ此系ハ塔より末の宮小
 戸如く小影白照く射小反而東の方れ影小影入ると奇好
 のるこ屋土も塔影の穴と射入る事ハさうて人の事と

する事もや輟耕稼後漢業決りてあり海トあり此系寺
 の塔影とんくは後よりぞ訪宿の塔影のうらるも盡くさ
 まくこいふ事とさうさうなり

東遊記後編卷之四

